

シンポジウムの記録



山崎光悦学長の総合挨拶



中村慎一機構長の挨拶



国立民族学博物館 関雄二氏の基調講演



谷川竜一氏の発表



前島訓子氏の発表



菅原裕文氏の発表



河合望氏の発表



総合討論風景



国立民族学博物館 須藤健一館長による閉会の挨拶



world heritage
金沢大学主催シンポジウム

世界遺産 と共 に 生 き る

地域と人々の
視点から

- 13:15 開場
- 13:30-13:35 開会の挨拶
中村慎一 (金沢大学新学術領域研究機構機構長)
- 13:35-13:40 趣旨説明
河合 望 (金沢大学新学術創成研究機構准教授)
- 13:40-14:30 基調講演「アンデス文明の文化遺産の保護と活用」
関 雄二 (国立民族学博物館教授)
- 14:30-14:55 「生活に囲まれ、埋もれ、世界遺産 法隆寺は建つー斑鳩の記憶アーカイブ化事業を通じた文化資源の把握」
谷川竜一 (金沢大学新学術創成研究機構助教)
- 14:55-15:20 「世界遺産登録からみた遺跡と地域社会の変容ーインド・ブッダガヤを事例に」
前島訓子 (名古屋大学大学院研究員)
- 休憩
- 15:30-15:55 「トルコ、カッパドキアのキリスト教聖堂群の文化資源的な活用に向けて」
菅原裕文 (金沢大学歴史言語文化学系准教授)
- 15:55-16:20 「エジプトの世界遺産ルクソールの古代遺跡とともに生きる人々と地域」
河合 望
- 16:20-16:45 総合討議
- 16:45-16:50 閉会の挨拶
須藤健一 (国立民族学博物館館長)

日時：2017年1月28日(土)

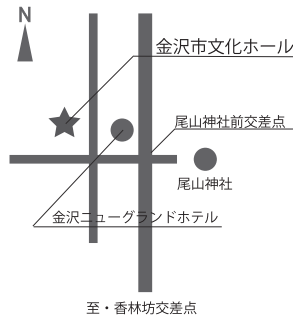
13:30*~16:50 (*13時15分開場)

場所：金沢市文化ホール・大会議室

(金沢市高岡町15番1号)

参加費無料・定員先着50名

世界遺産は、保護され大切に扱われるべき貴重な文化遺産であると同時に、うまく活用すれば豊かな「利益」をもたらす観光資源として考えられています。しかし誰が何のためにその価値を守り、どのように活用するのかといった議論の蓄積は、いまだ厚くありません。そこで本シンポジウムでは、世界遺産を抱える様々な地域の視点に立ち、そこにおける振興と文化遺産保護、そして住民生活の保全・改善に関する取り組みや議論を紹介します。



主催：金沢大学 新学術創成研究機構
未来社会創造コア 文化遺産国際協力
ネットワークユニット

共催：国立民族学博物館、
金沢大学人文学類、
金沢大学国際文化資源学研究中心、
金沢大学超然プロジェクト「文化資源
マネジメントの世界的研究・教育
拠点形成」

問い合わせ：河合 望

nozomu.kawai@staff.kanazawa-u.ac.jp
TEL 076-265-5859

新学術創成研究機構

編集後記——謝辞にかえて

『文化資源学研究』第20号は、2017年1月28日に行ったシンポジウム「世界遺産と共に生きる」をもとに、各発表者に論考の執筆を依頼し、それらをまとめたものである。

同シンポジウムは国立民族学博物館との共催であり、同博物館からは須藤健一館長、関雄二教授を迎え、基調講演や総合コメントを頂いた。残念ながら諸事情により本論文集にはその記録は掲載できなかったが、同博物館のお力添えのおかげで本シンポジウムが大変充実したものとなったことを主催者一同、感謝とともに記しておきたい。

またシンポジウムには、金沢大学の山崎光悦学長、および同大学・新学術創成研究機構の中村慎一機構長からも、ご挨拶並びにコメントを頂くことができた。主催者・编者である金沢大学 新学術創成研究機構 文化遺産国際協力ネットワーク構成メンバー一同より深謝をお伝えしたい。

本論文集は、金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センターの出版物であると同時に、前述した文化遺産国際協力ネットワーク構成メンバーの活動報告書という意味ももつ。同ユニットは3年目を迎え、研究内容をますます深化・発展させている。今後、さらに多様な媒体での発表やイベント企画などへ活動の幅を広げていくことを計画している。これからも関係各位からのご支援を賜ることができれば幸いである。

2018年3月1日

金沢大学 新学術創成研究機構
文化遺産国際協力ネットワーク構成メンバー
河合 望・谷川竜一

執筆者プロフィール (50音順)

河合 望

(金沢大学新学術創成研究機構准教授)

1968年東京都生まれ。早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了。米国ジョンズ・ホプキンス大学大学院近東研究科博士課程修了 (Ph.D.)。早稲田大学高等研究所准教授、カイロ・アメリカン大学客員教授等を経て、2016年より現職。

約30年にわたりエジプト現地での発掘調査や保存修復事業に従事。専門、エジプト学。とくに新王国時代の歴史と考古学を専門とする。著書に『ツタンカーメン 少年王の謎』(集英社、2012年)、共著書に『エジプト王家の谷・西谷学術調査報告書 [I] - アメンヘテプ3世王墓 (KV 22) を中心として -』(中央公論美術出版、2008年) など、共訳書に『一冊でわかる 古代エジプト』(岩波書店、2007年) がある。

菅原裕文

(金沢大学人文学類准教授)

1974年、横浜市生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程芸術学(美術史)修了。博士(文学)。

主な論文に「カッパドキアにおける慈愛の聖母の受容」(『美術史』第162冊、2007年、pp.84-97)、「優しさの形-エレウサ型アンナ像の出現とその意義」(『地中海学研究』第35号、2012年、pp.55-74)、「図像・空間・儀式-カッパドキア、ギョレメ、チャルクル・キリセ」(『聖堂の小宇宙』竹林舎、2016年、pp.115-136) など。

谷川竜一

(金沢大学・新学術創成研究機構・助教)

大分県生まれ、斑鳩町育ち。東京大学大学院工学系研究科博士課程中退(工学博士(建築))、東京大学生産技術研究所・助教、京都大学地域研究統合情報センター・助教をへて2015年より現職。

専門はアジア近現代建築史。主な著作に、『灯台から考える海の近代』(京都大学出版会、2016年)、「 $\Delta 3.75^\circ$ の近代-旧朝鮮総督府庁舎からみる建築設計の歴史的可能性」(谷川竜一ほか編『衝突と変奏のジャスティス』青弓社、2016年、pp.114-137) ほか。

前島訓子

(椋山女学園大学・愛知大学・愛知淑徳大学・鈴鹿高等専門学校他・非常勤講師)

1980年、伊勢市生まれ。名古屋大学大学院環境学研究科博士後期課程満期退学。博士(社会学)。国立民族学博物館外来研究員、名古屋大学大学院環境学研究科助教を経て現職。

専門は社会学、地域研究(南アジア)。主な著書に、『遺跡から「聖地」へ: グローバル化を生きる仏教聖地』(法蔵館、2018年)、「ムスリム住民にとっての「仏教聖地」ブッダガヤ復興」(野口淳、安倍雅史編著『イスラームと文化財』新泉社、2015年、pp.214-231)、「インド仏教聖地と文化遺産-ボードガヤーの変容」(鈴木正崇編『アジアの文化遺産-過去・現在・未来』慶應義塾大学東アジア研究所、2015年、pp.155-181) ほか。

金沢大学 文化資源学研究 第20号

発行日 2018年3月31日

発行 金沢大学人間社会研究域附属
国際文化資源学研究センター
〒920-1192 石川県金沢市角間町

編者 河合 望・谷川竜一

印刷 株式会社 栄光プリント
〒920-0806 金沢市神宮寺3-4-17